

孫。衆議院議員

新藤 義孝

国を守り、平和を守るDNA——。

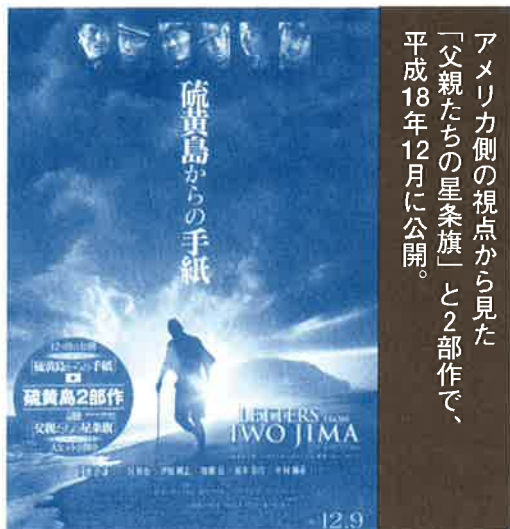
アメリカが最も恐れ、かつ尊敬した男——。

祖父・陸軍大将

栗林 忠道

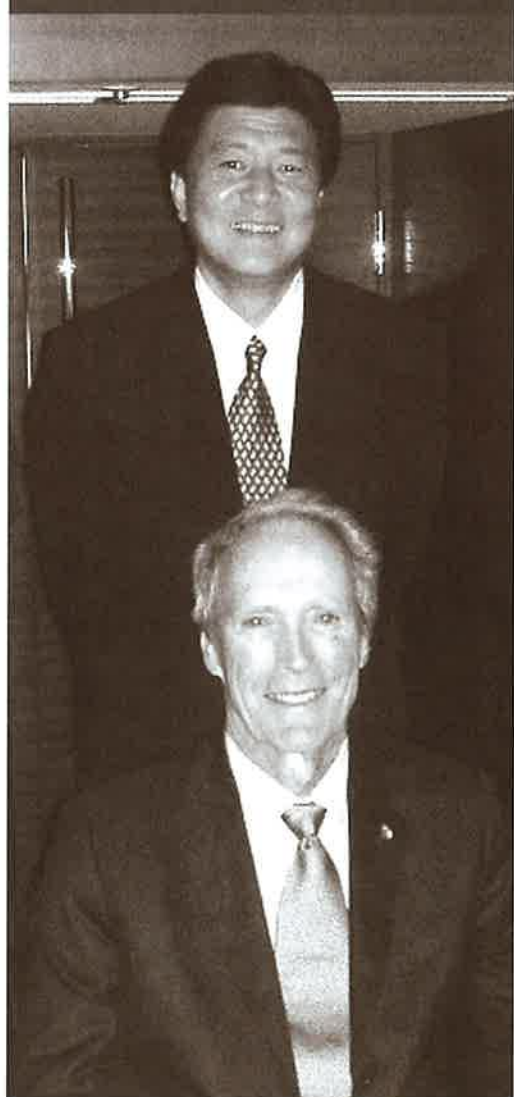


栗林陸軍大将と硫黄島戦を、クリント・イーストウッド監督が映画化！



アメリカ側の視点から見た「父親たちの星条旗」と2部作で、平成18年12月に公開。

クリント・イーストウッド監督と会談



■イーストウッド氏が会いたいと

「クリント・イーストウッド氏が会いたいと言ってきている」ハリウッドを代表する映画俳優にしてアカデミー賞受賞監督としても知られる巨匠が、硫黄島戦の映画化に着手。ついでには、遺族から直に話を聞きたいというのです。

私の母方の祖父である栗林忠道・陸軍大将は、硫黄島守備隊の最高司令官を務めました。祖母や母から伝え聞いた祖父の生涯とその人柄、遺稿・遺品、数多くの資料を通して知り得たその生き様は、私の原体験として私の人生観にも大きな影響を与えています。

2万129名の日本軍戦死者と、それを上回る2万8686名の米軍戦死傷者を出し、太平洋戦争最大の激戦「硫黄島戦」。私は現在、その遺族と数少ない生還者による「硫黄島協会」の顧問を務めています。今なお島には1万3458柱もの遺骨が残されたままであり、同協会では戦没者の慰霊と遺骨収集活動を続けています。

私たち遺族は映像化するならば、何としても私たちの心情を汲み取ってもらいたい。そう思いながら、会いに向かったのです。

■硫黄島戦と祖父 栗林忠道

米軍基地のあったサイパン島と東京の間にある硫黄島は、日米双方に戦略的価値をもつ島でした。日本への空襲の中継基地としたい米軍は、昭和20年2月19日、海兵隊6万人を先頭に15万人で攻撃を開始しました。

戦況が悪化する中、硫黄島守備隊2万1000人は孤立無援の戦いを余儀な

くされました。圧倒的な戦力差もあり、米軍は、5日間で島を攻略できると考えていました。迎え撃つ栗林総司令官は、島中に地下壕を掘って陣地とし、前代未聞のゲリラ戦を展開。36日間にわたり激しい抵抗を続けましたが、3月26日、約800人による突撃を最後に、日本軍の組織的戦闘は終了しました。栗林は砲弾を受けた後、部下に「司令官の首を敵に渡すな」と言い残し自決。その遺骨は未だ発見されていません。

■死地にあった兵士たちの想い

日本軍が死にものぐるいで抗戦したのは、B29の本土への来襲を防ぎたい一心からでした。祖国と愛する家族を守るために。

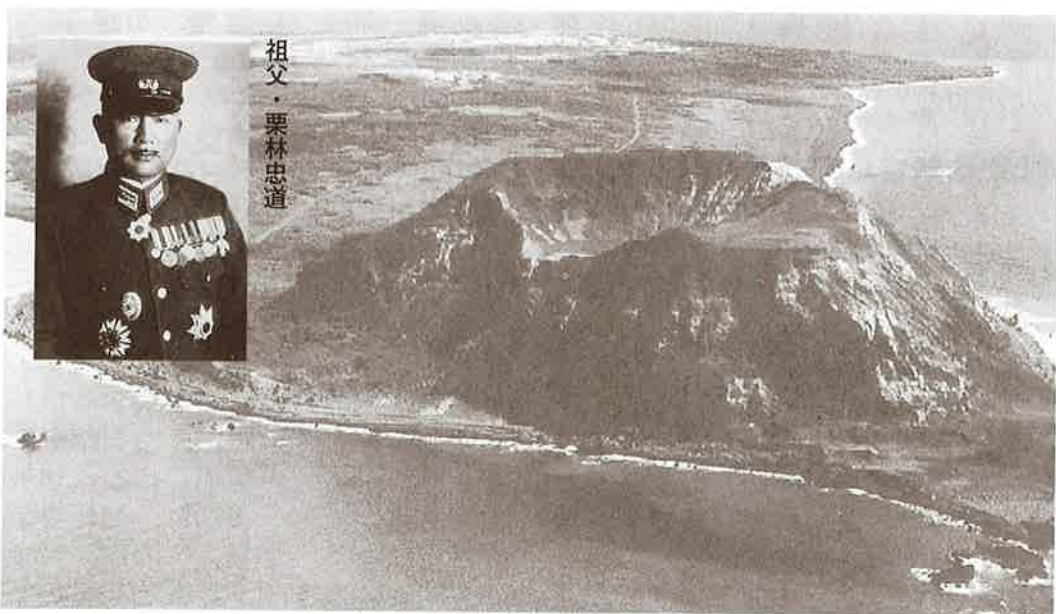
兵士たちのその想いは、日本もアメリカも違いはありません。硫黄島協会は、米海兵隊と連携をとり、毎年この島で慰霊祭を行っています。

今年3月にも、日米あわせて800名以上の遺族らが、この地で命を落とした者への思いを寄せました。敵対していた国同士が合同で慰霊式典を実施するのは、世界でもこの硫黄島だけなのです。

■イーストウッド氏へ～私の願い

私の母、たか子は昨年逝去しました。伯父にあたる太郎も先日亡くなりました。もはや戦争の記憶は風化されつつありますが、言うまでもなく、戦争は二度と決して起こしてはなりません。

私の話を真摯な眼差しで受け止めてくれたイーストウッド監督は、会談の最後に「従来あるような単なる戦争映画にはしない。家族の絆、戦場に散った兵士一人ひとりの想いを、今を生きる若い世代へのメッセージとしたい」と語ってくれました。



祖父・栗林忠道

戦後は米国の占領下にあったが、昭和43年小笠原諸島返還によって日本の領土に戻った。しかし、基地があるのみで、遺族の渡島さえ、ままならない状況が続いている。

主人公である栗林忠道を演じる渡辺謙さんのこと。

主演・渡辺謙と祖父の墓参りの後で。



■「硫黄島からの手紙」

クリント・イーストウッド監督は、この太平洋戦争最大の激戦と言われる戦闘を、日米双方の視点から描きたいという構想を持っていました。

そのうちのひとつ、硫黄島の播鉢山に米国旗を打ち立てた6人の米軍兵士を描いた作品を「父親たちの星条旗」とし、日本側の視点から描かれたもうひとつの作品が「硫黄島からの手紙」です。

■渡辺 謙さんのこと

主人公、私の母方の祖父となる栗林忠道を演じるのは、今やハリウッドスターとして名高い渡辺 謙さんです。その渡辺さんから「撮影に入る前にぜひお会いしたい」という連絡がありました。

渡辺 謙さんは、想像していた以上に謙虚で穏和な方でした。配役が決まってから、硫黄島や栗林忠道に関する文献を調べて読み漁っていたそうで、私たちの話を聞きながら熱心にメモを取っていました。

2万余の硫黄島守備隊に対し、米

軍は6万の上陸部隊を先頭に総数15万人を投入。「絶対に勝てるはずのない戦いに、降伏するという道もあるのに、日本人は負けるのがわかっていながら何故戦うのか」アメリカ的合理主義では理解できない日本人の行動と心情が、この映画のテーマのひとつです。日本人として、そうした心情を表現しなければならない、と熱い思いを私に語ってくれました。

渡辺 謙さんは、「ラストサムライの撮影の時にも、『人を守るために自分が犠牲になる』という武士道精神は、騎士道精神を文化に持ったヨーロッパの人たちには理解してもらえなかったが、アメリカ人にはなかなかわかってもらえなかった」と語っていました。

対談から数日後、役を演ずる前にお墓参りをしたいという渡辺 謙さんを、長野市松代の明德寺にある栗林家の墓にお連れしました。遺族を気遣っていただくと共に、今回の役づくりにかけるトップ俳優としての心意気に、私は感心しました。



■遺族たちの想いを次世代へ

映画の発表があった日と同じ日、硫黄島では、今年も日米合同慰霊祭が行われました。私は、遺族を代表し、尊い犠牲となった英霊に追悼のことばを述べました。

「この硫黄ガスが噴き出す小さな

島で、玉砕突撃をせず地下のトンネルに籠もり、死ぬより苦しい生を生き抜いた皆様は、何を支えに戦ってくれたのでしょうか。私の祖父が、当時10歳だった娘に宛てた手紙にその本当の理由が見えてきます…。私たちは過去の厳しい戦いを決して忘れることなく、また何よりも平和を守るために戦って戴いた皆様方の気持ちを受け止めて、国の発展と世界の平和のために私たち一人一人が努力していかなければならない。そのことを教えていただくのがこの島でございます…」

2万人を超える日本軍戦死者。生還したのはわずか1,033名。戦後60年以上を経た今、生存者も20名程。英霊たちを直接知る遺族も高齢化しています。当時の悲惨な状況を知らない世代が大半となっている今こそ、現在の平和が尊い犠牲の下に成り立っていることを知り、繰り返してはいけない悲しみの歴史に思いを馳せる。今回の映画が、その一助となればと願っています。



日米合同慰霊祭にて遺族を代表し、英霊に追悼のことばを述べる



「玉砕総指揮官」の絵手紙(文庫)

栗林忠道(著)、吉田津由子(編集)
小学館 630円

■「たこちゃんへ」で
はじまる一連の手紙

軍事研究のため渡米した先から、まだ字の読めない3歳の長男・太郎に宛てたたくさんの絵手紙。戦地・硫黄島から、愛娘(新藤の母)に宛てた「たこちゃんへ」という書き出しではじまる一連の手紙。若き日の留学の地アメリカから最期の地・硫黄島まで、陸軍中将栗林忠道がわが子に書き綴った子供たちへの手紙を初公開。父親の深い愛情とユーモアに溢れた文面。この本は、映画『硫黄島からの手紙』のベースになったもう一つの戦中史です。



散るぞ悲しき
硫黄島総指揮官・栗林忠道(単行本)
梯久美子(著) 新潮社 1,575円

■2006年大宅壮一
ノンフィクション賞受賞

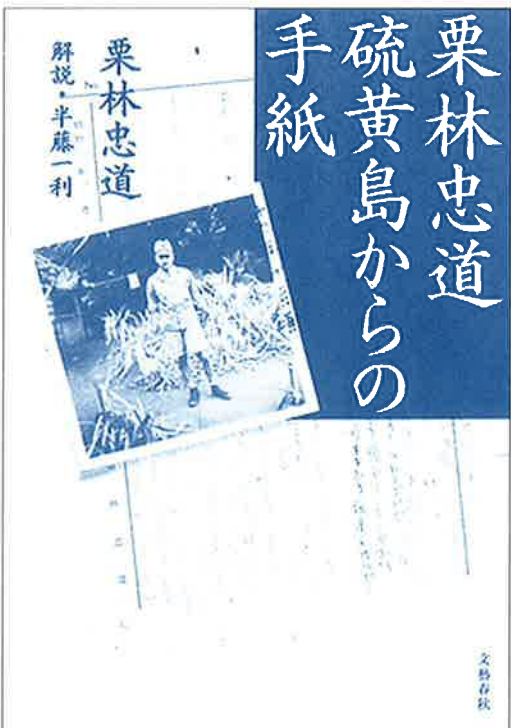
硫黄島で米軍を最も怖れさせた指揮官は、家族に手紙を送り続けた父でもあった…。絶海の孤島・硫黄島で、総指揮官は何を思い、いかに戦ったのか…。妻子を気遣う41通の手紙。死にゆく将兵を「散るぞ悲しき」とうたった帝国軍人らしからぬ辞世。玉砕という美学を拒み、苦しい生を生きた烈々たる記録。最期まで部下と行動を共にした指揮官のギリギリの胸中に迫る。2006年大宅壮一ノンフィクション賞を圧倒的評価で受賞した各紙誌絶賛の傑作。



常に諸子の先頭に在り―
陸軍中將栗林忠道と硫黄島戦(単行本)
留守晴夫(著) 慧文社 3,150円

■帝国陸軍屈指の知米派・栗林の見事な生涯を辿る

米軍の死傷者数が日本軍のそれを上回った唯一の戦闘、硫黄島戦。今もアメリカでは、名将「栗林忠道」が、書物や映像によって語り継がれるが、日本では名前さえ忘れられて久しい。「アメリカだけとは戦うな」そう主張し続けた帝国陸軍屈指の知米派・栗林が、皮肉にも米海兵隊の大軍を硫黄島で迎え撃ち、常に諸子の先頭に立ち、40日間におよぶ死闘と壮烈な戦死を遂げるまでの見事な生涯を辿る。アメリカ文学者による異色の栗林中將論。



栗林忠道硫黄島からの手紙(単行本)
栗林忠道(著)、半藤一利(著)
文藝春秋 1,000円

■妻や、娘に送った奇跡の書簡のすべてを集めた本書

太平洋戦争屈指の激戦、硫黄島の戦い。緻密な防御戦術で米軍を恐怖に陥れた名将・栗林。その家族に宛てた手紙からは優しい夫・父親としての顔が浮かび上がる。留守宅の妻や、疎開先の末娘に送った数多くの手紙。奇跡の書簡のすべてを集めた本書は、家族への愛情にあふれていて涙なくしては読めない。半藤一利氏による解説、さらに詳細な注と年譜が、戦争に予備知識のない読者にもわかりやすく、かくも「品格ある日本人」がいたことを知る最適の一冊。

その他にも数多くの栗林忠道関連の著書が発刊されています。



栗林忠道硫黄島の戦いーアメリカが最も恐れ、そして最も尊敬した男(単行本)
別冊・宝島 1200円

■開戦に賛成していなかった

栗林は、私にとって内なる誇りです。栗林は人間味溢れる手紙を、硫黄島から家族に送っている『ひよこが野菜をたべて困るよ』とか、たちゃん(新藤の母)から来た手紙の漢字の間違いも指摘している。一方では人間味溢れる人。逆に戦場では究極のリアリストだった。

栗林は若いころにアメリカに留学し、国力の圧倒的違いからの戦争に賛成していなかった。しかし、軍部は開戦派が力を持ち、栗林は冷遇された。戦局がいよいよ厳しくなった昭和19年。硫黄島へ司令官として行く。帰る見込みのない役目を持たされた。栗林はもともと反対しているんだし、拒否しようと思えばできるわけですよね。しかし、逃げれば逃げられたのに、任務を引き受ける。

そして栗林は、それまでの日本軍の戦い方を180度転換させました。栗林は玉砕するなどといった。1日でも長く持ちこたえることが、本土空襲をくい止め、家族を守ることだ、国を守ることだと指揮した。苦しくてもバンザイ突撃するなどいい、島中にトンネルを掘って、ゲリラ戦法ですよね、それで戦い抜いた。

■無駄な戦いをしてはいけない

栗林は戦いを長引かせている間に戦争をやめさせ、終戦交渉を進めてほしかったんです。苦しい時に逃げないで、逆に作戦変更までして積極的に行動した。国のためでもあるけれど、自分の大切な子供とか家族のために、鬼のような戦いをしたんだと思います。

私が栗林を誇りに思っているのはその人間性です。他人にいたりすることではないのでずっと私の心の中の内なる誇りとしてきました。自分もその心は受け継いでいるはずだと。いや、受け継がなければならないと思います。このような悲惨な苦しい戦いがあるって、いまの平和があるということ、次の世代に伝えていかなければならないと思っています。もっときちっと情報を取ってれば、戦争にならなかったかもしれない。私たちは過去の戦争のことに蓋をしないで事実を知り二度と悲惨な戦争を行なわないということが、貴い犠牲となった英霊に報いることだと思います



硫黄島は東京から1250kmのところにある。小笠原諸島の南端に位置する。米軍は、日本本土の攻撃に向け、その中継地として、硫黄島奪取を図った。



終戦特集・戦争の爪痕を知る
 ①戦禍の硫黄島 鎮魂いまだ癒えず
 硫黄島協会会長・遠藤喜義×新藤義孝

■「散るぞ悲しき」

新藤／最初はアメリカ側からの映画化だけだった。ところが、撮れば撮るほど日本は勝てるわけもないのになぜ降参しなかったのかわからない。で、一生懸命調べたらおじいちゃんからの、絵手紙が出てきて、それでこれも映画化して、世界中の人に知らせよう、こういうことになったそうです。

遠藤／ところで先生の心に残る一番の想いを教えていただけますか。

新藤／おじいさんが、これで組織的な戦闘がもうできなくなると大本営に電報を打った、辞世の句がある。これが、

「国の為重きつとめを果たし得て矢弾尽き果て散るぞ悲しき」という歌なんです。

遠藤／この歌は、閣下の心情を見事に表現していると思います。

新藤／この歌に影響されて、私も今の心境を一句に託したんですが、これは、

「安らかにしばし鎮まれ御霊らよ故山迎える時のくるまで」という歌で、

願いを込めたものです。

遠藤／まさしく、私達の気持ちを代弁されていますね。天皇陛下の句にも、確か、“悲しき”という言葉が。

新藤／はい、その祖父の句に対しては、天皇陛下が平成六年に島に行かれた際に、

「精魂を込め戦ひし人未だ地下に眠りて島は悲しき」と、こういうふうに戻してくださった。

ところがしかし、当時のことを言えば、勇ましい戦争中に「悲しき」という言葉を使ったことは、大本営にとっては不本意で、それを[口惜し]に直して発表していた。

遠藤／[口惜し]と「悲しき」じゃあ、全然ニュアンスが違ってしまいます。けれども、陛下の御製にも、「悲しき」の文字が刻まれている。陛下の心にも強く響いたのでしょう。

新藤／おじいさんが打った電報の原文、「悲しき」に二重線を引っ張って[口惜し]にしたその電報を、これが遺骨代わりですと言ってうちに届けてくれた方がいて、事実がわかったんですよ。家族は六十年間、それを大事に保存してきました。



硫黄島での日米の戦闘において、栗林(中央)は敵軍からも賞賛される名将だった。



昭和18年8月、親族とともに撮影したたか子の写真(新藤・母)。それから10カ月後、父・忠道は戦地からたか子へ手紙を送り始める。

『末娘のたか子さんは、当時10歳だった。別れの日に門の前で泣いた。お父さんの栗林忠道さんは「たこちゃん、元気ですか」とい

う短い遺書を硫黄島から送った。「お父さんは、お家に帰って、お母さんとたこちゃんを連れて町を歩いている夢などを時々見ますが、それはなかなか出来ない事です。」▶「たこちゃん。お父さんはたこちゃんが大きくなって、お母さんの力になれる人になることばかりを思っています。からだを丈夫にし、勉強もし、お母さんの言いつけをよく守り、お父さんに安心させるようにして下さい。戦地のお父さんより」▶若いころ米国に留学していて国力の差をよく知っていた栗林さんは、米国との戦争に勝ち目はないと主張した。そのため主戦派の軍上層部に嫌われ、絶対に生きて帰れない硫黄島守備隊の司令官を命じられたと言われている。▶着任した栗林さんは、まず島の住民を戦火に巻き込まれないよう強制疎開させた。掘ればすぐ硫黄ガスの混じった蒸気がわき出る島にトンネルを掘り、要塞化した。そして、できる限り敵を食い止めるから、早く終戦交渉を始めるよう上申した。▶地下の洞窟に立てこもった硫黄島守備隊2万は、押し寄せる米軍上陸部隊

6万、支援部隊22万を相手に歴史に残る激闘を演じて、全滅した。しかし東京のソファに座った戦争指導者たちは終戦の決断ができなかった。いたずらに時が流れ、沖縄、広島、長崎と、多くの国民の命が失われた。▶重い責任を負わされたらだれでも逃げたくなる。体が逃げなくても、心が逃げれば思考停止になる。だが栗林さんのように踏みとどまる人はいる。いっしょに散歩した日のたこちゃんの小さな手の感触が支えだったのだろうか。責任から逃れなくなったら、栗林さんの短い文章を思い出すといい。時を超えて励ましてくれる気がする。』

(平成12年8月9日の毎日新聞「余録」)

『たこちゃんこと、たか子さんの家は東京大空襲で焼けた。疎開先の長野では姉が病死した。戦後、お母さんが、女手一つで兄妹2人の子供を育てた。たか子さんは、早大在学中に大映の新人女優に選ばれたが、助監督と結ばれて主婦になった。大学に入りなおして、幼稚園の教員資格をとり、いまま埼玉で幼稚園長をしている。子息は衆議院に出た。当選2回の若手だが、「日本の顔の見える国際貢献」をライフワークと考えている。▶ある日、たか子さんは、お母さんから、夢枕に栗林さんが現れて「いま帰ったよ」と言ったと聞かされた。ほどなく、硫黄島が、米国から返還されたという知らせが来た。不思議な夢として、一家に語り継がれている。』

(前文省略8月21日の毎日新聞「余録」)

毎日新聞「戦後60年の原点」(硫黄島の攻防を再考する)より

遺骨返るまで戦いは終わらぬ

しんどう・よしたか

1958年埼玉県川口市生まれ。自民党衆院議員、当選3回。母は栗林忠道の二女たか子さん。



映画は前評判が高いようだ。若い人を含めてたくさんの方があの戦いに関心をもち、戦争の悲惨さを知ってくることが、先祖への最大の供養になると思う。

映画の製作にあたって、私を含めた遺族らが作る硫黄島協会も、脚本の段階から相談を受けた。イーストウッド監督にも撮影に入る前と編集する前の2度、お会いした。「単なる戦争映画、一方が善で他方が悪という話ではなく、ヒューマンドキュメントにしたい」と話しておられた。われわれは、ただ硫黄島に関心が集まればいい、というわけではない。いいかげん

慰霊の島にできれば

新藤義孝さん(衆院議員) そうじゃない。現にこういう資料がある。などやりあつていた。いいものを作りた、という熱意を感じた。硫黄島は日本の領土。それなのに遺骨収集は半分も済んでいない。日本軍の地下壕が崩れていたり、米軍が遺体を隠すために植えた木が成長してジャングルのようにな

つていたりして難しい。しかし遺骨に返ってきてもらうまで、私たちの「戦い」は終わらない。生き残った元兵士は家族にも戦争の様子を話さないことが多い。今回「父親たちの星条旗」の試写を見て、アメリカでも同じなんだなあ、と思った。つらすぎる体験を思い出したくないのだろう。しかし、後に続く私たちは忘れてはいけない。

現在、島に民間人がおらず、自衛隊の基地があるだけ。島に渡るには制約が多く、遺族や関係者でさえ訪れたことのない人がいる。しかし、遺族以外にも、慰霊のために行きたいという人はたくさんおられる。遺骨収集を完了し、多くの人が訪れることのできる慰霊の島にしたい。それが自分のライフワークだと思っている。

表面だけで歴史は分からない

栗林中将は、旧日本陸軍の理性派だった。「天皇陛下万歳」で思考を止めてしまう軍人とは明らかに肌合いが違っていた。残された資料を見ると、戦争そのものに懐疑的だったことがうかがえる。しかし、栗林中将は硫黄島でよく戦った。兵力差は、(人員、装備などを統合して)10対1かそれ以上だったと思う。にもかかわらず、日本軍を上回る損害を米軍に与えた。上陸する敵兵を水際で撃退するとい陸軍の伝統的な戦法を捨て、主な陣地を海岸から離して配置した。戦争末期で、日本側が制空権も制海権も失っていた状況で、水際での作戦にこだわっていたら防衛力が短期間に低下してしまう。そのことを、過去の戦闘を研究して知っていたのだらう。激しい米軍の空襲のもので、2万人が潜水

奮戦に励みぬ軍中樞

保坂正康さん(作家) 地下陣地を築いたのも、不可能を可能にする力を感じさせる。本土決戦の準備を整えるために、時間をかせぐ。それが、日本軍中樞部がこしらえた硫黄島の戦いの大義名分だった。栗林中将はそれに応えて奮戦した。ところが実際には準備はほとんど進まず、硫黄島への補給もろくにしなかった。軍中樞の無慈悲さ、非人間的な側面を示している。最近、出演した「靖国問題」をめぐるテレビ番組で、若い人が「戦前の指導者を選んだのも国民。指導者だけに責任を押し付けてしまうのはおかしい」という意味の主張をした。しかし、例えば選挙制度だけを

みても、当時は国民全体が指導者を選ぶシステムにはなっていない。そうした番組に出てくるからには歴史に対する意識の高い若者だと思ふ。それでも、そんなことを言ってしまう。がくせんとした。客観性に裏打ちされていれば、考え方の違いだから、右派でも左派でもいいと思う。しかし表面だけ知って歴史を分かったように言うのは、客観的に歴史を見ようとして

いる人への「暴力」になる。栗林中将の奮戦の一方で、軍の持つ非人間的な側面をも知ることが大切だと思ふ。

ほさか・まさやす

1939年札幌市生まれ。ノンフィクション作家。昭和史研究の第一人者で、04年菊池寛賞受賞。



栗林忠道略歴年譜

1891年(明治24年)

長野県埴科郡松代町に生まれる。

1911年(明治44年・21歳)

陸軍士官学校と上海東亜同文書院を受験、
ともに合格。

1914年(大正3年・24歳)

陸軍士官学校卒業。任・陸軍騎兵少尉。

1918年(大正7年・28歳)

任・騎兵中尉(中隊付)。

1920年(大正9年・30歳)

陸軍大学校入校(35期)。

1923年(大正12年・33歳)

任・騎兵大尉。

陸軍大学校優等卒業。御賜の軍刀を賜る。
栗林義井(19歳)と結婚。

1924年(大正13年・34歳)

長男・太郎生まれる。

1928年(昭和3年・38歳)

アメリカ合衆国留学に出発。

1931年(昭和6年・41歳)

カナダ公使館附武官に任命される。
(初代カナダ駐在武官)

1934年(昭和9年・44歳)

次女・たか子生まれる。

1940年(昭和15年・50歳)

陸軍少将、習志野騎兵第二旅団長。

1943年(昭和18年・53歳)

叙・勲二等授端宝章。任・陸軍中將。

1944年(昭和19年・54歳)

(6月10日) 硫黄島に出陣。

家族との最後の別れ。

1945年(昭和20年)

(2月19日) アメリカ軍、硫黄島に上陸開始。

(3月17日) 硫黄島より最後の電文を発する。

陸軍大将に任官される。

(3月26日) 陣頭に戦死(享年54歳)。

1967年(昭和42年)

忠道、勲一等旭日大授章を受ける。

2003年(平成15年)

妻 義井死去(享年99歳)。

2004年(平成16年)

次女 新藤たか子死去(享年69歳)。

2005年(平成17年)

長男 太郎死去(享年80歳)。



新藤義孝後援会事務所

〒332-0034 川口市並木1-10-22 TEL.048-254-6000 FAX.048-254-5550